

令和3年度 奈良市立青和こども園 研究実践概要

園長名 林 陽子

全園児数 141名

1. 研究主題

“やってみたい”から主体的な遊びへつながる環境構成と援助の在り方
～わくわくする心・やわらかい心・つながる心～

2. 研究年度

初年度

3. 研究主題設定理由

子ども達は、友達や周囲の環境への興味をもつ子が多い半面、失敗することを嫌がったり、周囲の目を気にしたりすることから、自ら動き出すことを戸惑う子どもが多く見られるようになってきている。子ども達が「やってみたい」と感じる環境に出会い、自ら関わる中で、「わくわくどきどき」や「(試行錯誤や挑戦をする中で)もう一回やってみよう」、「一緒にするともっと楽しい」という気持ちをもつことが主体的に遊ぶ姿につながるのではないかと考えた。安心・安全な環境を最優先とする中で、子ども達の心が動き体が動くような環境構成や援助を探っていききたい。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子ども達が園生活を送る中で、心を動かし主体的に活動する姿を探る。

②研究の重点

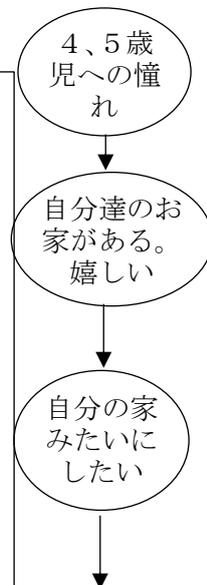
- ・研究主題について、研修及びカンファレンスを行い、職員間で相互理解を深め、研究を進める。
- ・子ども達の心の動きを見つめ、心や体が動く瞬間をとらえ、その要因を明らかにする。
- ・安心・安全な環境の中で、子ども達が主体的に活動するための保育内容や環境構成及び援助について協議する。

③活動の方法

○ 心や体の動き _____ 心や体が動いた要因

【事例】「おうちをつくらう」 3歳児 10月～11月

園庭にある木製の家で遊ぶ4、5歳児の様子を見たA児の「私たちのおうちをつくりたい」という声を聞き、B児とC児も賛同した。次の日、保育室前の砂場横にブルーシートを敷き、段ボールで囲い、机を置いて、子ども達がイメージしたものを実現できるよう準備し、おうちの横には、画用紙やペン、セロハンテープ、段ボールなどを用意し製作ができるようにした。その様子を見た子どもたちは「おうちができてる！」と喜んだ。おうちでごちそうをつくらうたりして遊んでいるうちに、「Bはテレビつくらうかな。AちゃんとCちゃんいっしょにしよう」と話しながらテレビの画面をかいたり、「Cはお化粧したい。」「顔にポンポンするのと口紅つくる」「鏡もつくりたい」と口々に思いを話しながらお家の中にある物をつくり始めた。保育者も大きな家具(テレビや鏡台、洗濯機など)を子ども達と相談しながら一緒につくる。「私お母さん。お化粧してるの。」「テレビ何



(どの番組)見る?」「洗濯干さなくちゃ、ああ忙しい。」とお家の人になりきって遊ぶ。「お風呂もつくりたい。」と保育者が用意した大きな段ボール箱に、みんなで集めた葉っぱを入れると、子どもたちが次々に「温かくて気持ちいい!」「一緒に入ろう」と友達を誘って何度も出たり入ったりを繰り返す。「おうちできたね。」と嬉しそうに話しながら、毎日友達と誘い合って遊びが続いた。



友達と一緒に遊んで楽しい

もっと遊びたい

(反省と評価)

- ・保育者がそばにいて、安心して生活することができ、友達に興味をもつ姿につながった。友達と遊ぶ中で、自分の思いを出しながら遊びを楽しむ姿が見られ、保育者とのかわりの大切さを改めて実感した。
- ・保育者が遊びの中で、思ったことを進んで話したり、子どもの伝えたいことをわかりやすい言葉にして周囲に伝えたりすることで、簡単な言葉のやりとりをして遊ぶ嬉しさを味わう姿につながった。
- ・一人一人がイメージしていることや、やってみたいと思っていることを大切に受け止め、保育者がすぐに素材を提供したり、一緒に製作するなど手助けをしてきた。そのことで、思いが実現することの満足感や嬉しさを感じ、保育者や友達と一緒にお家ごっこで何日も続けて遊び込む姿につながった。

【事例】「氷がなくなった」 4歳児 1月

朝、保育室前にあった前日の氷が溶けていることに気づいたA児の「あれっ?(氷が)なくなってる。」の声に数人の幼児が集まり「水になってるなあ。」と残念そうにしている。「昨日の氷はどこで見つけたの。」と保育者が聞くと「裏の畑のたらいの中。」「今日もあるかも。」とみんなで見に行くことにした。「こっちこっち」と少し得意げにみんなを案内するA児が「先生、今日も氷できてる。」と嬉しそうに伝える。他の幼児も「うわっ! つるつる。」「冷たくて硬いね。」と見たり触れたりしている。保育者も「冷たいね。」と一緒に氷の感触を楽しみながら、みんなで見ることができるように、たらいを広い場所に移動する。A児が「なんで保育室の前の氷はなくなったのに、ここ(たらいの中)には氷があるんやろう。」と疑問をつぶやく。「不思議だよね。」と保育者が共感すると、子ども達は「2階やからかな。」「(昨日の)お昼にとけたのかな。」「あったかいと溶けるんちゃうかな。」と考えたことを話し出す。D児が「じゃあ、あのバケツの水も違うところに置いたらもう一回氷になるかな。」と言うと「いいね。」と子ども達も言い、保育者も「やってみよう。どこに置く?」と一緒に考える。相談の結果1階の入り口が寒いのでは?と、園の昇降口に置いておくことにした。次の日の朝、「少しだけ凍ってるよ。」とみんなで喜び合った。その後も「今日の氷は小さかったよ。」「違う場所にもあった。」「持って、お日様にあてたらキラキラしたよ。」等と氷に興味をもち、毎日気づいたことを知らせ合う姿があった。

残念

氷を見つけて嬉しい

不思議

やってみよう

成功した

発見する喜び
伝え合う
楽しさ

(反省と評価)

- ・氷の変化に気づいたことで、冬の自然現象に興味をもち、クラス全体で疑問や喜び、試す

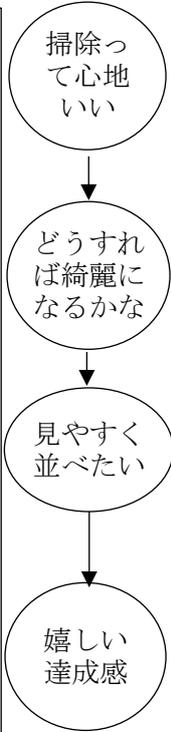
ことの楽しさを共有できた。子どもたちの気づきを逃さないよう、言葉にして知らせたことで、さらに好奇心や探求心が芽生える機会となった。

- ・条件を変えてくり返しみんなで氷作りをしたり、本や図鑑を身近に置いておいたりすることで、子どもたちの興味関心がさらに深まり、やってみたいという意欲につながった。

【事例】「今日はどうしてみない」～絵本整理～ 5歳児 7月

4月から継続して、給食後に掃き掃除・靴箱掃除・雑巾がけなど、グループで掃除に取り組んでいる。掃除方法や道具の使い方などを話し合ったり、頑張っている姿を具体的に褒めたり励ましたりすることを積み重ねてきたことで、自分達で掃除をし、綺麗になる心地よさを感じられるようになってきている。

互いに声を掛け合って絵本整理を始めたグループのA児が、「いいこと考えてきたんだけど、今日はちょっと違うやり方でやってみない。」と提案する。「え、なに？」と他の3人も興味をもつ。A児「絵本って大きさが違うから見えやすいように大きさ分けをしたらいいと思う。」「いいね。やってみよう。」とみんなで絵本を棚から全部出し始める。保育者も自分達でしようとしている姿を見守りながら、「なるほど。」と相づちをうったり、「全部出してみるんだね。」とやっていることを言語化したりする。「本と本を重ねてみたら、大きさがわかるね。」「大きさ別に置いていこう。」と相談しながら全てのほんの大きさ分けが終わる。「一番大きいのから戻そう。」と一冊一冊を丁寧に戻し始める。グループの中で、A児の指示を聞きながらやっていたC・D児も進んで片付ける。「とっても綺麗になったね。」と保育者が声をかけハイタッチをすると、「だってみんなで頑張ったもん。」と4人ともとても満足げな表情を見せた。

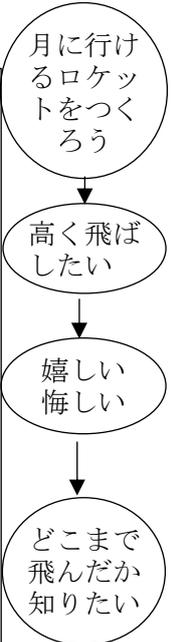


(反省と評価)

- ・友達と声を掛け合いながら、自分たちで絵本整理を進める中で、「こうしたらいいのではないか」と考えたことを伝え合い、自分たちでやり遂げる達成感を味わった。
- ・子ども達が考えたことを行動している姿を、具体的に言語化することで、同じグループの子ども達が共通理解し、同じ目的をもって協働する姿につながった。

【事例3】 「ロケット発射！！」 5歳児9月

お月見に向けて、月に興味もてるよう、日々の月の様子を掲示した。月に行ってみたいという気持ちをもった子ども達はロケットづくりを始め、できたロケットを手で飛ばしていた。子ども達の月に向けて上に飛ばしたいという思いから、保育者は子ども達と一緒に考えながら、ゴム付きの発射台をつくる。」「わあ～面白そう」「ロケットの打ち上げやってみない」と、ペットボトルや牛乳パック、ラップ芯など空き容器を使って発射台に合わせたロケットをつくり始める。ロケットを飛ばして遊ぶ中で、「僕のほうが高く飛んだ。」「あんまり飛ばへんかった。」と友達と高く飛ばす競争を始める。その中で、A児が「どこまで飛んだかわからへんな。」と言うとB児「ここまで飛んだってわかるのが、何かあったらいいねん。」A児「高いのがあるな。」と話す。方法がわからず困っている。保育者が大きな板段ボールを持って来ると、「ちょうどいい。」「どこまで飛んだかわかる印つけられるようにしよう。」と、自分のロケットがとんだ高さに印がつけられる



ボードを保育者とともにつくる。「さっきより高く飛ばそう。」「軽い方が飛ぶと思う」「新記録目指すねん。」とより高く飛ばしたいという思いをもち、使う素材や飛ばし方などを毎日試行錯誤しながら遊びが続いた。



友達より高く飛ばしたい

(反省と評価)

- ・印をつけていけるボードを作ったことで、自分や友達のロケットが飛んだ高さが目で見てわかり、「もっと高くしたい。」と次の目標を明確にし、それに向けて試行錯誤する姿につながった。
- ・保育者が見守り、子どもの思いを実現できるよう、必要に応じて知識や技術をヒントとして提供したことで、子ども達の心や体が動き、遊びが発展していく楽しさを味わうことができた。

5. 研究の成果

- ・3歳児は、保育者と友達との存在、遊びの場が近くにあることで情緒が安定し、進んで遊び始めたり、自分を出して遊んだりするようになる。その中で、保育者が一人一人の子どもに丁寧に寄り添い、思いを引き出したり、イメージが広がるような環境を整えたりすることで、「もっと遊びたい。」という意欲が育ち、「またしたい。」と心が動き、主体的に遊ぶ姿につながると感じた。
- ・4歳児は、環境にじっくり関わる時間を十分に確保することで、友達とのかかわりを深めながら自分の思いや考えを出し合い、友達と一体感を感じるようになる。時には、保育者がともに悩んだり相談相手となったりして仲間の一員になることで、子ども達の「やってみよう」とする気持ちの支えとなる。子ども同士がつながり合う喜びや楽しさを味わうことが、遊びこむ姿につながるのではないかと考えた。
- ・5歳児は、目標があることで、やってみようとする意欲をもち、少しの困難に出会うことで、何とかしたいという気持ちが生まれる。今までの経験から、見通しをもって試したり挑戦したりすることができるが、友達の刺激や意見、保育者の見守りや必要に応じた声かけがあることで、それを持続することができるのではないかと考える。
- ・わくわくする心とは、やってみようと思ったり、友達や異年齢児の刺激を受けたり、結果を想像してみたりすること、やわらかい心とは、遊びながら発想が広がり、「こうしてみよう」「どうなるかな」と目的や疑問に向かってやってみたり、うまくいかなかったときに、「何故だろう」「もう一回やってみよう」としたり、友達の様子や意見を受け入れやってみたりすること、つながる心とは、友達の刺激を受け友達と目的を共有しながら遊びを進めたり、ものとかかわることで特性を知りイメージを広げて遊んだり、保育者や友達との信頼関係の中で安心して遊びこんだりすることと捉えた。

6. 今後の課題

子どもたちが、好奇心や探求心をもって周囲の様々な環境にかかわり、心を動かし、発見を楽しんだり考えたりしたことを、言葉や体で表現し、主体的に遊ぶ姿を見つめてきた。今後、更に環境から子ども達の興味や関心を引き出すことができるような状況を作り、主体的に遊びに取り組む中で、自分なりに考えや思いを表現する過程や心の動きを大切に見つめ、一人一人の育ちや各年齢の保育内容に沿った環境構成や援助を探っていききたい。